

20世紀前半の東アジア地域における日本人建築家の活動に関する研究

正会員 西澤泰彦君

日本近代史研究において、植民地支配の問題は、近年、あらためて重要視されている。建築史・都市史研究の分野でも、戦前期日本の統治地域、すなわち台湾・朝鮮半島・中国東北部（「満洲」）などを対象とする研究が活発におこなわれるようになってきた。西澤泰彦君はそうした潮流の先導者として、20年以上にわたって研究を蓄積してきた。受賞論文はその成果をまとめたもので、12編の論文からなる。

それらを通して、同君は、東アジア地域において日本人が関わった建築・都市を、植民地支配の社会的・経済的な文脈の中で複眼的に捉えようとしている。その視点の多角性と総合性は、研究の集大成ともいえる著作『日本植民地建築論』において、はっきりと見ることができる。

第1章「植民地の政治と建築」では、支配機関の整備のなかで建築組織が形成されていく過程を精査し、その活動の中心である官衙建築について詳述する。第2章「植民地の経済と建築」では、植民地銀行・国策会社と建築の関わりを建設投資や土地経営の分析からさぐる。第3章「植民地の社会と建築」では、公共建築と商業施設の両面から、植民地社会の「近代化」の中で建設された主要な建築物についてその様態を解明する。第4章「建築活動を支えたもの」では、建設技術の各地域への適応、技術者・労働力という人的資源の確保、煉瓦・セメントを中心とする材料の生産といった物的基盤の問題を論じたのち、各地で整備された建築規則を分析して、法的規制を通じた不燃化や衛生の改善の様相を解明する。第5章「世界と日本のはざまの建築」は、いわば総論として提示されるものである。そこでは本国および各植民地間でのヒト・材料・情報の移動の状況を解明して、「帝国」日本の版図を超えたネットワークの存在を指摘したうえで、日本人による植民地建築を、欧米各国の東アジア植民地建築と比較して「世界建築」としての位置を考察する。すなわち、欧米に負けない支配能力を示すために欧米の建築と比肩しうる普遍性を備えようと務めてきたことを論じ、翻って、和風モチーフを採用したとする説を否定する。また、意匠面・構造面においては世界の動向に先駆ける先進性を有していたことを述べる。そして終章「日本植民地建築の過去・現在・未来」では、日本の植民地支配における「民生の向上」が、「覇道を正当化するための王道」にすぎなかったことを指摘したうえで、その建築遺構は植民地支配の本質を示す遺産・資産として扱われるべきであることを提言する。

同君が長く努力を傾注してきた対象は「満洲」建築史であったが、台湾・朝鮮の動向も十分に把握して、植民地支配の全体像を描き上げている。なにより旧植民地建築研究は史料の滅失という問題があるうえに、日本人による現地での調査については種々の困難が伴う。同君はよくそれを克服して、上記の総合的叙述を成し遂げたことは驚嘆すべき力業といえる。婉曲と留保を排したその叙述は明快である。同君は長年にわたって、何を問うべきか、何を明らかにすべきかを見定め、その設問に答えきった。その賜物としてこの明快さを獲得したのである。

この論文は間違いなく日本近代建築史研究における里程標となる存在であり、その寄与するところはまことに大きい。

よって、ここに日本建築学会賞を贈るものである。